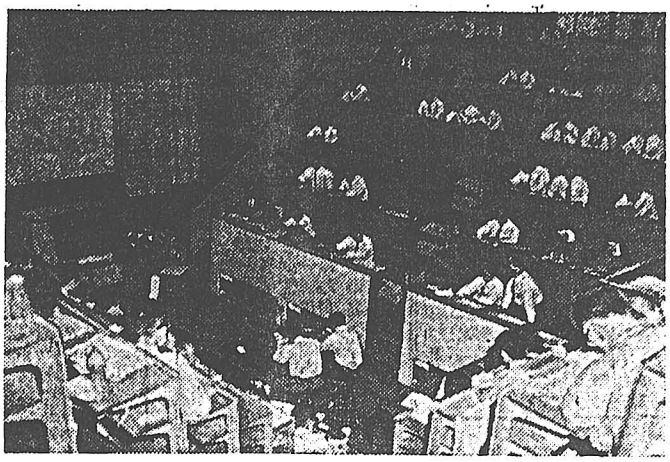
昭和36年(1961年)6月12日　月曜日

熊本で初の"小児マヒ"学会

水俣病の遺伝？ 脳性マヒ

原田氏（熊大助教授）注目の発言

第九十五回日本小児科学会熊本地方会は、青田丈夫熊大小児科教授の開講二周年を記念して、十一日午前十時から熊大付属病院臨床講堂で同医学部関係者や県内外の開業医など約百二十人が集まって開かれた。この学会ではとくに県下に猛威をふるっている小児マヒ問題を中心議題に取り上げ、熊本では初の「ポリオ（小児マヒ）シンポジウム」が開かれ、小児マヒ患者の臨床的観察について各方面から研究発表が行なわれた。



小児科学会熊本地方会の会場

期待はずれ ガランタミン

発表の中心は、さきに熊大ほか県内の七病院で行なわれた小児マヒ治療薬"ガランタミン"の治療効果についての中間報告。

県下では、さる五月八日から百三人の希望者のうちセキズイ性マヒ患者八十二人に治療が行なわれたが、発表者は直接治療にあたった水俣日窒病院大原浮、熊大小児科上野留夫、樋口徹達、人吉総合病院増田力、阿蘇中央病院出来田耕、宇土市上野四郎、八代総合病院山内明、熊大一外科松岡成朗（筋肉図による治療）の各医師で、この七氏の報告では、ガランタミンは当初宣伝されたほどすぐれた特効薬ではなく、熊大など七カ所で八十二例の臨床テストをした結果、三十二例に有効、二十六例にやや有効で、小児マヒにかかってすぐガランタミンを注射した場合にかなりきめがよく副作用もすくないというデータが発表された。また今回は比較的古い患者に注射したため治療成績もあまり期待できず、臨床効果も五四％たらずだったと報告された。

シンポジウムのほかに、本年流行のポリオについて、と題して熊大小児科坂田鎮医師ほか五人から環境衛生、血清免疫、疫学、ピールス学的立場からみた観察の研究発表もあったが、これと関連して青田教授はガランタミンの生理、薬理的作用について文献からみた治療効果を解説、熊大玉井達二教授の"ポリオの整形外科的治療"、六反田勝吉教授の"ポリオの予防（微生物学からみたポリオピールスの生態）"などの特別講演も行なわれた。

さらに熊大小児科原田純孝助教授は、さきごろ注目をあつめた「水俣病と水俣地方に多い脳性小児マヒ患者の関連性」について臨床研究の成果を発表、水俣の脳性マヒ多発の原因はまだわからないが、患者の母親や乳汁や小児の頭髪、さい（臍）帯血に多量の有機水銀が見受けられるところから遺伝的な因子によるものと思われると報告して注目された。